

## 一般教育の1・2年生を対象とした多言語プレゼンテーション/ 暗唱コンテスト—コンテストと個人学習を促す授業との緩やかな連携の紹介と結果の考察

Concours de présentation et de récitation en diverses langues pour les étudiants non-spécialisés de 1<sup>ère</sup> et 2<sup>ème</sup> année — présentation du concours et de sa relation sommaire avec le cours invitant au travail personnel et réflexion sur le résultat

田中 陽子

TANAKA Yoko

Université de Kyûshû

tanakay@flc.kyushu-u.ac.jp

### <はじめに>

九州大学言語文化研究院では 2009 年度から学内の「教育の質向上支援プログラム」に採択された1・2年生対象の「多言語プレゼンテーション・コンテスト」を開催している。発表言語は英語、韓国語、中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、日本語（留学生向け）で、九州大学が学部生に第1外国語・第2外国語として履修を認めているすべての言語を対象としている。

2010 年度からは英語と日本語以外の言語については暗唱コンテストも同時に行っている。

プレゼンテーション・コンテストは学生自らで情報収集し、考察の結果を纏めて、プレゼンテーションツールを使って学習した言語でプレゼンテーションを行う(5分以上8分以内の発表、一人でも複数でも応募可能)活動を行うという能動的学習によって、学生がクリティカル・シンキングを深め、言語学習意欲を深化させかつ言語能力を飛躍させ、コミュニケーション能力を高めることを目的としている。

暗誦コンテスト(英語・日本語以外)は、大学ではじめて学習する言語であるにもかかわらず、学習する時間が極めて限られている一般教育の授業の枠では学習対象とするにはレベルの高い内容の深いテキストに、その意志のある学生が取り組み、自らの理解を音声に込めて発表するという自律学習を通して、対象言語のテキストとの深い出会いの経験をし、言語力の飛躍とコミュニケーション能力を高めることを目的としている。

この2つのコンテストの紹介、並びに、フランス語の授業で筆者が行った暗誦コンテストとの緩やかな連携についての紹介と学生アンケートを参照しながら、大学の初修外国語教育における教室外コンテストの意義について考察することが本稿の目的である。初修外国語に関しては、カリキュラムの中での履修時間数が減少している状況にあつて、このよ

## **Rencontres Pédagogiques du Kansai 2011**

うなコンテストの存在が一部の学生の潜在的関心と意欲を顕在化させ、コンテスト準備そのものがそうである自律学習へと向かわせている。同時に、それ以外の学生も、コンテストの広報や出場する学生の存在に刺激され、潜在的には言語能力の向上によってコミュニケーション能力を高めたいという欲求を持ちながら、漫然と受動的に学んでいた言語に対して、使用の場を提供された言語として、さらには、実際にコミュニケーションの手段である使われる言語として認識の更新がなされ、学習に取り組む姿勢に何らかの変化をあたえているのではないかと考えている。

### **1. プレゼンテーション・コンテスト**

#### **1-1. 創設の経緯**

「多言語プレゼンテーション・コンテスト」の前身は、2007年から2年間行われた「英語によるプレゼンテーション・コンテスト」である。九州大学では英語教育の改善の一つの試みとして、英語によるプレゼンテーションの練習を含む少人数制の授業を1、2年生の授業(担当教員によって授業におけるプレゼンテーションに充当する内容や時間数はバリエーションがある)をそれぞれ1単位ずつ必修としてすべての学生に課している。さらにその授業の延長として、コンテストという場を設け、参加を奨励し、学生自らが情報の収集、分析、考察を行い、その結果をプレゼンテーションするという情報発信型の能動的学習を促すことにより、学生の学習意欲向上を図る試みを行うと同時に教員の授業そのものの質的改善を目指すことにした。

2009年からは上記の他の7言語も対象とした「多言語コンテスト」として実施した。

英語によるコンテストに関しては、予選を行い応募者の中から、書類審査を経た10人程度が選抜され、本戦に参加している。英語以外の言語は予選なしとし、応募者全員が本戦に参加できることにした。

#### **1-2. 初修外国語とプレゼンテーション・コンテスト**

初修外国語の場合、英語と事情は大きく異なる。1月に開催されるプレゼンテーション・コンテストの準備に学生が取りかかる12月迄の授業時間数は、1年生の場合、4月から全くの初心者として履修開始し、週2回の授業であるから、わずか30時間程度の履修時間の時点でのコンテストということになる。言語自体の基本構造の理解と基本スキルの習得にさえ十分な時間が確保できないカリキュラム構成の中、学生の言語レベルから考えても、プレゼンテーションに関する授業を実施することは、英語の場合と違って、教育的にも不可能であり、大多数の学生にとって、適切なレベルの授業ではないといえる。2年生にしても、学生が第2外国語として選択するケースが大多数の中で、文系で1年生より1単位多く履修が義務づけられているにすぎない。プレゼンテーションに特化した授業は不可能といえる。あくまでも授業とは切り離された形のコンテストへの学生の自発的参加という形にならざるをえない。しかも九州大学の場合、キャンパス事情もあり、応募対象者の大半は、英語による「プレゼンテーション・コンテスト」の経験からして、大多数は1年生となることが予想される。様々な観点から無謀な試みとも言えるものである。(ただし、英語と違って出場学生の発表準備には教員側からのある程度のサポートがあることは伝えている。)

ところで、実際応募した学生数は以下のとおりであった。

英語の応募者 88 人(予選を経て最終出場者 9 人、内 2 年生 2 人)

初修外国語の応募者 31 人(予選なし、最終出場者と同数、内 2 年生 9 人)

<ドイツ語 7 名、フランス語 3 組 4 名、韓国語 14 組 16 名、中国語 4 名>

履修学生の母数は英語と初修外国語はほぼ同数であることを考えると、初修外国語におけるプレゼンテーション・コンテストが授業とは独立した形で行われているという事実、学びの初期の学習段階での挑戦という事実、また、リンガ・フランカとしての英語の所謂ステータスを考えれば、初修外国語に対する学生のチャレンジ精神は注目に値するのではないだろうか。英語ばかりに応募者が集中するわけでもないことが確認され、後にみるアンケート結果からもわかるように、学生が初修外国語に関しても、さらに言語能力を高めたいという意欲をもっているということが窺えた。しかも定期試験開始 10 日前がコンテスト日だったということも問題があり、この点も改善されれば、応募者は増加する可能性が期待できると思われる。プレゼンテーション・コンテストは英語は勿論であるが、近年日本の大学において周縁化されがちな英語以外の外国語についてもある程度の人数の学生の意欲と関心を顕在化したといえるし、英語は勿論であるが、初修外国語に関しても、出場学生はもとより、その他の学生に対しても、ただ、受動的に学ぶための言語ということから、それを使いこなすための言語としての意識化にも貢献したと考えられる(その点については筆者が行ったクラスアンケートに窺われるが、紙面の都合でここでは埒曖する)。2010 年度の発表者の動画は web で一般公開(<http://ijapanese.net/cep/>)しているので、それらを次年度の授業で紹介することにより、学生の意識化はさらに効果的に行われることになると考えられるし、出場者も増加することが期待される。

### 1-3. 『大学生の外国語プレゼンテーション入門-基本スキルと 8ヶ国表現集』

学生のプレゼンテーション・コンテスト準備を容易にするために、英語を含めてプレゼンテーション用の基本表現集の作成を企画した。これは現在『大学生の外国語プレゼンテーション入門-基本スキルと 8ヶ国表現集』(朝日出版社)として完成している。2011 年中に音声もつけて九州大学の言語文化研究院のホームページを通して一般公開し、すべての人が利用できるようになる予定である。この表現集そのものが、当該言語の話されている地域や世界についての学生の認識を広げるような文章からなっており、学生自らのプレゼンテーションに役に立つと同時に学生の知識の地平も広げることにも配慮したものとなっている。この表現集の完成によりコンテストに挑戦する学生の増加も期待できるのではないかと考えている。

(フランス語に関してはコンテスト直前にはほぼ完成していたギャラ版を出場予定学生に渡し、準備に供するようにした。フランス語に関しては、音声なしの完成版を筆者のメールを通して請求頂ければ現段階ですぐに送ることができます。)

## 2. 暗誦コンテスト

### 2-1. フランス語暗唱テキストと出場者に関して

英語と日本語以外による暗誦コンテストの暗誦テキストに関しては、各語で固有の方針を出すことにした。フランス語に関しては、(1)自分で選ぶ。(2)授業担当教員に相談する。(3)プレゼン/

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2011

暗唱コンテスト担当教員(筆者)が提案するテキストにする。という3つの方法を提案した。全体の出場者は13人で、フランス語の出場者は8人(内2年生一人)であった。8人中6人は上記の(3)の方法を選んだ。学生に紹介したテキスト選びに関しては、(1) インターネットやCDで音声を得やすいもの (2) 日常会話ではないテキスト とすることにした。その結果全てが比較的長いシャンソンになった。提案したテキストは以下の通りである。テキストには日本語訳をつけた。

Luc Plamondon : Le temps des cathédrales / Bohémienne / Belle / Florence

<Notre Dame de Paris (comédie musicale)より>

Yves Duteil : La langue de chez nous / Tous les droits des enfants

上記テキスト以外に、自らで「Le petit Prince」や聖書の「伝導の書」の抜粋を選んだ学生もいた。暗誦コンテストといえば通常は同じテキストの暗誦を競うことになるが、内容も含めて学生が自らの意欲を掻き立てるテキストを選ぶことに主眼を置いた。学生8人のうち3人は2種類のテキストの暗誦に挑戦した。決して彼ら彼女らにとって容易なことではなかったにもかかわらず、また定期試験も迫っていたにもかかわらず各自(内一人はプレゼンテーション・コンテストにも出場)の努力の成果は、優劣をつけ難いものであった。

※フランス語の暗誦/プレゼンテーション・コンテスト出場者の動画は

<http://133.5.23.59/presentation/french/index.html>で閲覧可。

### 2-2. 暗誦コンテストと授業との緩やかな連携の試み

暗誦コンテストのために紹介するテキストに関しては、筆者の担当するクラスの学生にもすべて日本語訳つきでプリントを配布した。時間の制約でフランス語には殆どふれず日本語訳のみを内容理解のために紹介した。“Notre Dame de Paris (comédie musicale)”に関してはミュージカルそのもののDVDの該当するシャンソンを時々鑑賞させ、Yves Duteilのシャンソンに関してはCDを聞かせた。ただ、授業ではフランス語の基本を取り扱うべきと考えるため、授業の時間はなるべく割かないという原則を貫き、その都度5分から7分程度の時間を何度か充当した。すべての受講者に自分が選んだシャンソンの4パラグラフ程度を皆の前で暗誦することを課した。10点満点の配点とした。シャンソンの動画へのアクセスや音声の入手の方法なども紹介したが、授業でフランス語そのものは取り扱っていないテキストなので、学生にとっては過重な課題となりかなり無謀な試みだとは思っていたが、教室外の学生の自学に任せた。4クラス(2010年度1年後期「フランス語II」のクラス107名)のうち、大半の学生が発音そのものやフランス語の読みができていないクラスが2クラスあり、そうした学生の負担を考えると、その後実施するアンケートでは重すぎる課題に異議が多くだされると予想していたが、アンケートの結果は次頁の表にあるように(紙面の都合でここでは一部のみの紹介)、4クラス全体で約60%の学生が肯定的評価をしている。また、ここには表の形では掲載できないが、4クラスのうち、比較的フランス語の発音や読みができていない学生が大多数を占める2クラスの方が、できている学生が多いクラスより、<(1)とてもよかった(2)よかった>の合計評価率が高かった(70,3%対57,1%)ことは予想外であったが、多くの学生のフランス語のスキルを高めたいという潜在的欲求が確認できたと思う。①の質問に(3)(4)(5)と答えた学生でも全体の66.2%が、<発音のために役にたった・授業以外の内容あるテキストにふれることができた・フランス語の総合的向上に役にたった・提案されたテキストに興味があった>と

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2011

いう肯定的評価を選んでおり、多くの学生が教室外の課題の効果に一定の評価をしていることがわかる。

①授業で暗誦が課されましたがそれについて		② ①で(1)(2)と答えた方 (複数回答可)	
(1)とてもよかった	8.3%	(1)発音のために役にたった	42.6%
(2)よかった	52.3%	(2)授業以外の内容あるテキストにふれることができた	15.7%
(3)あってもなくてもよい	18.3%	(3)フランス語の総合的向上に役にたった	23.5%
(4)どちらかといえばない方がよい	10.1%	(4)テキストの内容に興味があった	4.3%
(5)ない方がよい	11.0%	(5)暗誦のための練習が楽しめた	11.3%
		(6)その他 (シャンソンに少し興味を持つようになった /する前に比べると文構造が頭に入った /文化にふれられた/文法の暗記に役立った	2.6%

### 3.コンテスト出場者アンケートから

両コンテスト当日、出場者に対して行ったアンケートの出場動機に関する回答によると、初修外国語の場合、言語能力そのものの向上への期待が高いことがわかる。英語と違って履修時間が絶対的に少ない段階なので当然と言えば当然である。プレゼンテーションの内容についての参考資料に関しては、初修外国語の場合、教科書以外の書籍を参照した学生の割合は英語とあまり変わりなかった(英25%対初修28%)が、雑誌・新聞(38%対10%)やテレビ番組(50%対8%)は参照者の割合が英語より低く、インターネットを参考にした割合(50%対70%)が高かった。インターネットは参考になりうる原語資料が豊富なので、初修外国語の多くの学生が参照し、言語表現そのものを参考にしたケースが多かったと思われる。新しい時代の能動的な外国語習得の強力な一手段としてのインターネットの存在を学生は切実に認識したと思う。

このコンテストへの応募動機は何ですか。(複数選択可)	英語8人中	初修40人中
外国語学習の成果や自分の実力を試してみたかったから。	13%	38%
外国語の能力が向上するだろうと思ったから。	13%	48%
単位取得や成績に加算点があるから。	38%	0%
自分の意見を発表したかったから。	50%	3%
教員から勧められたから。	50%	60%
副賞【図書カード】(註)がほしいかったから。	0%	28%
友人から誘われたから。	13%	15%
その他	25%	3%

(註)表彰と副賞について プレゼンテーション: 最優秀賞1件 賞状・トロフィーおよび副賞(図書カード3万円相当) 優秀賞2件 賞状・楯および副賞(図書カード1万円相当) その他の本選出場各件 参加賞(図書カード3千円相当) // 暗誦: 最優秀賞各言語1件 副賞5000円相当の図書カード 優秀賞各言語3件以内 副賞3000円相当の図書カード 本選発表者各件 副賞1500円相当の図書券

### <最後に>

第2外国語の教育は、英語教育の緊急性と重要性が強調されるに伴って日本の大学において後退してきた。ところで、国際化の時代を生きる学生においては、英語の習得は勿論、英語以外の外国語も習得して、コミュニケーションの手段として世界に対する自らの窓を広げたいとする潜在的欲求はかなり高いように思われる。また、大学が交換留学協定を結んでいる英語圏以外の大学数も飛躍的に増加し、学生が英語圏以外の大学に留学する機会も増えた。こうした状況に鑑みて、英語はもとよりその他の外国語修得の飛躍を図るこのようなコンテストの開催は、カリキュラムの制約の中、教室外での自律学習を促し(自主学習の手段としてプレゼンテーションの教材とコンテストの動画・Web一般公開)、参加する学生はもとよりそれ以外の学生に対しても大きな可能性と意味をもっていると考える。